

農青社「協同組合はいいか悪い」(昭和六年(1931)八月中旬発行)

わが茨城県下には水戸市外に愛郷塾をいとなんでいる橋孝三郎がいる。氏は文字どおり偉軀をひき上げ、東西に奔走せられ、おれ達百姓のみずからを救わねばならない所以について熱論をふるわれ、その実行を叫ばれている。

そして、貧乏に追われねばならなかった県下各村の村民は、氏の熱弁に、ようやく耳をかたむけてゐるかの感がもてるのである。氏の声は県下を風靡しようとさえしている。

が、かれら筑波の青年有志は、必ずしも、氏の提唱するところに遽に賛同し得ないのである。否、むしろ、氏の声が全県下の村民を魅了しつつあることについて、それを憂えるものだ。氏の熱誠な態度には、ことごとく敬服するけれども、その唱導せられるところに就ては多大の疑義をもつものであることを告白せねばならないのである。

愛郷の念において、守村運動の実際において、おれ達は決して橋氏に劣るものではない。しかしながら、筆舌に長ぜざるおれ達がどこまでよくおれたちの信ずる所を県下全青年諸兄に語り得るか、それは疑問である。それはそれとして、おれ達は語らねばならない。人間は植物ではない。植物はただじっとして、土地に根をはり、空中に枝をさしのべ、水分と日光と空気を吸収してさえいけば、生きて行けるのである。

けれども、人間はどんなにじっとしていても、一寸の布も、一握りの麦も生み出すことはできないのである。即ち、人間は働くことによって、生活に必要なものを生産して行かねばならぬ。これが人間と植物とこととなり、人間が人間たる所以なのである。

この意味では、「働かぬ者は食うべからず」ということは、まことに正しい言葉だ。しかし、今日、世の中で言われている「働かぬ者は食うべからず」ということは、決して、上述の意味を指して述べたものではない。

それは諸兄が知るように「金なき者は食うべからず」という意味である。おれ達自身の生活を見よ、すべてのやり方は、現金の収入をめあてにしているといつて、決して過言ではない。そして、農村本来の姿であつた自給自足生活は跡かたもなく、壊わされてしまつたのである。今日の社会組織が続くかぎり、どこまでも俺達を支配する法則は「金なき者は食うべからず」である。

だからして、いわゆる今日の社会組織について、それを一変せねばならぬことを思わぬかぎり、おれ達はどこまで行つても、金銭の奴隷となり、金のためにあくせくせねばならぬ運命を背負つてゐるのである。そして、そこに橋氏らのいわゆる「純粋経済主義運動」が生まれる因子がある。

橋氏等の考えも、畢竟するに、金銭による農村の解放にほかならないのである。

いわゆる氏の経済運動は協同組合を指すものである。協同組合の趣旨は、一般農業経営をもつと有利に、一箇の企業的性質のもとに、純粹に行おうとする意味である。つまるところ、農業を近代資本主義の方式によつて経営する思想にほかならぬのである。

肥料、種苗等の共同購入、農具、牛馬の共同使用等による経営投資の縮小による投下資本の節約化、他面、市場の価格変動に対し、組織的な報告機関をもつて鋭敏に感応し、時価のもつとも有利な栽培品種を選択することによる利益の拡大化、共同販売、農業倉庫などによる投売り防止とか、売出し時期の選択による農産物価格の合理化などをもつて、協同組合の目標としているのである。

こうした農業経営の方式は、橋氏の説くように、デンマークにおいては成功をおさめることが出来た。そして日本のデンマークといわれる愛知県碧海郡の農村においても、ある程度の成功を見たのである。

貧乏に追われるおれ達は、つねに、そうしたいわゆる経済力ゆたかな模範村にたいし、大きな羨望を感じるのである。これは全く止むを得ないとしても、おれ達がそれを他山の石として学ぼうとするならば、よほど周囲の事情からして研究する必要がある。

蛇足ながら隣県の、福島県のある模範村を実例にとつて見れば、その村がなぜ模範村であることが出来たか、調べてみると、その村にいわゆる水力電気の本社があるおかげで、それから納税される莫大な村税によつて、村が富んでいたにすぎなかった。

その村自体としては、何等、経済力を持たないところの、ざらにある普通の貧村にすぎなかった。それ故、のちに、その水力電気会社が市に移転するとともに、その模範村は、果して、一躍して同県下のもっともひどい寒村になりさがってしまったのである。

本筋から外れたけれど、これは何を物語るものであるだろうか。

碧海郡はたしかに他の地方にくらべて、村民の経済力がゆたかである。しかしながら、そのゆたかなわけは、決して協同組合に基くものではない。近接都市である名古屋は、いわゆる内国工業の東京中心地帯であつて、一般世相が不況の時であるにもかかわらず、比較的ではあるが、打撃が僅少であるのである(その理由は、同地工業が打撃のはなはだしい貿易工業ではなく、主として内地向きの、しかも、主として内需向きの、しかも比較的、景気に影響の少ない内国工業の商工中心地であるからである)。

かように特殊な近接都市を控えてこそ、碧海郡の農業の繁栄が成立したのであつて、若しも、名古屋市がそのような性質でなければ、碧海郡の繁栄は成立できないのであつて、若し、名古屋市がそうした性質のものでなければ、いかに碧海協同組合が焦慮しても、決して成功をみることは出来なかつたのである。

このことは、デンマークにおいても同様で、もし、デンマークが英独の二大消費国をもたなかつたならば、農業国としてのデンマークの今日の発展はみることが出来ないことである。すなわち、この意味では、碧海は大名古屋、デンマークは英、独に、その興亡を制約されていると言つても過言ではない。英国が亡びるときは、また、同様にデンマークの衰亡の時である。それは、ただ、近接都市の

繁榮によってのみ成立し得るにすぎないものである。

都市の繁榮に従属する、単なる従属的農村の繁榮にすぎないのである。

即ち、この意味では、碧海郡は大名古屋に、デンマークは英独に、その興亡を約束されているといつてよく、前述のように、都市の繁榮に従属する農村の小繁榮でしかない。

さて橋氏の説くところの協同組合運動は、同時に、また、帝国農会が、最近唱導するところでもある。

その述べるところは、全く何の異なるところもない。この意味では、帝農は、橋氏によき代弁者を得たといふべきである。帝農の説くところは、また、同時に政府が言わんと欲するところであつて、結局、政府当局は、即ち橋氏の説くところと全く同じことである。

橋氏は結局において、新興農民の味方たらんとして、却つて、橋氏自身が攻撃するところのブルジョア政府とえらぶところがなかったのだ。

政府当局や、帝農は、なにゆゑ農民の協同組合を唱導するのであらうか。

今日、村の不況はその極に達しつつあり、すっかり疲弊したおれ達は、もはや、税金も、年貢も、借金も、利子も支払う力はないのである。

しかし、おれたちはそれを払わぬわけにはいかない。しかし、若し、おれ達がそれらを払わなければ、それによって衣食している階級は、また付随的に亡びるほかはない。もし、おれ達が税金を払わなければ、財政は行き詰まり、国家は歳入がなくなつて亡びるほかはない。もし、そうだとすれば、税金の源泉であり（年額六千五百円の陸軍中将与年収二百八十円の自作農とは同額の税金である）、年貢のおさめ手であり、金貸しや、銀行の金儲けの源泉であり、もっとも大きな消費者階級であるおれ達を、かれ等は滅ぼしてはならないのである。

そこで、かれらは協同組合運動を唱導して、農村の小繁榮を実現することにより、おれ達のふところのなけなしの余剰？を掠めようと企てたのである。これは誰のためであらう。おれ達のためか。また、政府、地主、肥料屋、ブルジョア金貸のためか。それは言うまでもなく明らかであらう。

協同組合を唱導するかれらの魂胆には、こうした野望が存在しているのである。おれ達、百姓の経済力が伸びることではなくて、ブルジョアが富むことにほかならない。おれ達どん百姓に何のかわりもない。

おそらく橋氏はおれたちの味方ではあらう。けれども、その熱情は、おれたちの側に実を結ばずして、却つて農民を敵の手に売るものであるより外のない結果を見なければならぬ。おれたち、筑麓の青年が、橋氏の運動に賛同し得ない理由の一端はここにある。

この故に、吾等は断言せねばならぬ。協同組合は一般に信じられていように、農村を救うものではない。よく、農民は、しばしば

いわゆる狡猾な知恵者によって、敵に売られる。協同組合のごときは、そのもっとも誤まれ易いものであると思う。おれ達は賢明な諸兄の再考を望まずにはいられない。

橋氏は一面において、いわゆる農村の自給自足を説いていられるのである。特に、金肥購入の愚を説かれ、有畜農業による自給肥料の賢明なることをすすめている。このことは、同時に、おれたちの主張でもある。

この点については全く同一であるが、氏の自給自足はしかし、一般にはきわめてルーズなものである。

そして、氏の言う自給自足なるものは、帝国農会の言う自給自足とまったく違ふものである。いわゆる今日、世上に説かれて自給自足は、貧乏に追われるおれたちが必然にとらざるを得なかつた倭約主義以外のなものでもない。それは単に常識的に及ぶかぎりのものを農家で自給することというのである。だから、勿論、今日の農家で出来ない一般の物資は都会から購入するのである。こうした意味においては「無くとも我慢して済ます」と同じ意味の思想にすぎない。

極言すれば、不足生活に我慢せよ、満足せよと言うことである。これはいかなる発展性も成長性も見出すことはできない。もっとも消極的な応急対策でしかないのである。

かてて加えて、おれたちは橋氏等の運動に一つの予見を見出すことができる。氏等の運動は何処に行くのであらうか。橋氏等の運動の発足はいわゆる純粹の経済運動であつた。

それは政治とはまったく無関係なことを標榜せられたことにおいて発足したのであつた。しかしながら、氏等の方式では必然に政治にその最後の要求を生むであらう。いわゆるデンマーク式の農民党の誕生である。

現実的に（今日の社会組織のその限度内において）農村の経済力の伸長を計ろうとする氏等は、農村のもっとも大きな癌であるものに對して放任することはできないであらう。

それは税金だ。氏等はかならず「負担の過重」を叫んで立たねばならないであらう。また、同様に国家の農業経営に關与するためにも、政治的進出をはからねばならぬ。

このことは、必ずしも、おれ達の推定ではなく、氏等の機関誌「農業研究」にあらわれる諸氏の論稿に、その片鱗を見出すことができる。また、氏等と同様の見地に立つ、いわゆる重農主義の「農民」派のうちに、今秋行われた県議戦に群馬県から立候補した窪田某のごとき者が、現実的に見出される。然しながら、これは偶然ではなく必然の所産であるのである。

おれたちは橋氏の農民の味方であるその情熱は疑われない。けれども、情熱かならずしもよき実をむすぶことは出来ない。もし、その方式を誤れば逆の結果に陥るほかはないであらう。

氏の純粹経済主義の前途には、大なるシレンマが横たわることを、賢明な氏は必ず悟られているであらう。およそ人間の生きんとす

る本能は、他の何ものにも増して、絶対唯一の本能である。生きんとすればこそ、今日の世の中では、生存競争もまた必然である。今日のこの社会組織をこのままにして、いかに倫理道德を説いても、それは生活現実に直面するとき、何等のちからもない。現実のおれたちの村で、何が行われているであろうか。おれたちは隣人が栽培に失敗することを、むしろ祈っているのだ。そして、自分の畑だけが豊作であってくれと望んでいるのだ。そうすれば白菜は値が上がり、自分が儲けることができる。全く悲惨な悪徳である。

しかし、誰が、これを咎めることが出来るか。もし、どこかの家でも、白菜が満足に豊作されたなら、村全体は白菜の捨売りによって疲弊するだろう。こうした現実生活を前にして、村民の心からなる協同や、全国の農民の心からなる協同などは、望むべくもないであろう。ただ、そこには利害のために明日にでも別れて行くであろう処の単なる利害的協同があるにすぎないのである。

しかしながら、おれたちは、こうした生存のための相互闘争が決しておれたちを幸福にし、おれたちに発展をもたらし、おれたちに平和をはこんでくれるものであるとは考えることはできぬ。ただ、敗残や、沈滞や、悲惨が、そこから生まれることを知っている。誰が好んで、他人を傷つけてよろこぶことが出来るよう。

そうだ、今日の社会組織のもとで生きようとするならば、必ず、おれたちには幸福はない。生存競争は、かえって生存を否定することになる。生きんとしても、生きることが出来ない。

故に、おれ達は思う。生きんとする本能の充足をはかるためには、社会組織そのものに変化を与えねばならないのであると。

われわれが決して相互に闘争する必要のない、そして、現実に協同の理想を行なうことのできるような、そうした社会に、現在の社会を作り直さねばならないことを信ぜざるを得ないのである。いわゆる自由聯合主義とはこの運動を指すものである。

おれたちは、まず、明確な将来社会の概念を把握せねばならぬ。そして、それに到達するための全的努力を払わねばならぬことと信ずる。しかし、その努力の内容は、橋氏等のような、いわゆる純粹経済主義でもなければ、いわゆる無産党、農民党の政治運動でもない。

社会の建設目標としては無政府コンミュン、建設手段としては政治否定による直接行動、または経済行動によるものである。なお詳しくは農村青年社の「如何に為すべきか」、「農民に訴う」を参照されたい。

資料 (14)

農青社「茨城県愛郷塾の再批判 (日本村治派同盟を排撃せよ)」(昭和六年(1931)十一月二十三日発行)

はしがき

さきに俺等は茨城県愛郷会のいわゆる純粹経済運動、すなわち協同組合主義について批判するところがあった。その内容を大づかみに言えば、現時の農村の窮状は、協同組合のごとき単なる「農業経営の改善」などでは救うことができない。現社会の根本的大改造を行なわねば、おれたち五百五十万の農村は決して解放され得ない。では社会の大改造というのは何か。それは黒色運動による農工合体の共同社会の建設に邁進することである。すなわち、前回の「茨城県愛郷塾の批判」は、如上の点について力説するところがあった。

それが書かれたのは本年八月であったが、遂にわずか四カ月のうちに、おれたちの愛郷会に対する杞憂は形となってあらわれ、いまや日本村治派同盟(一種の農民政党)の結成となって農村を毒せんとしている。

おれたちは、この現実的状況に應じて、ここに「愛郷会の再批判」をなすものである。

多くの全茨城、あるいは村治派の名のもとに集結せんとする全国各村の未知未見の同志百姓青年、壮年諸兄よ、諸兄は今、ふかき谷に向かつて、きり立っている断崖の一端に立っているかの形である。それは実に危ない。一步誤まって村治派的運動に墮するならば、ついに来るべくして来たらんとする社会の大改造の機会は永久に去って戻ることあるまい。

そして、諸兄は、同じ今日の窮乏の生活をふたたび続けねばならないことは、火をみるより明らかなであるではないか。今日は些々たる重農政による改善運動の時ではない。根本的な社会組織の大改造を敢行せねばならぬ時である。乞う、諸兄よ、再びおれたち筑籠の百姓青年有志の声をきいてくれ。そして、出来るならば共に提契協力して、眞の解放のみに歩むことを満腔の熱誠もて切望する次第である。

全農民諸兄「吾等の起つべき秋は遂に来た」おれたちの立たねばならぬ時は、現在の今日のみではない。おれたちは起たねばならぬという悲痛な叫びは、全国のどこかの村かで、次々に叫ばれつづけられてきた。ひとつの村が力尽きて沈黙したときに、どこか他の村がその村にかわって叫んだ。しかし、まだ時機は熟せず、村には不況とか、不合理になやみながら昏々として眠りつづけていた、といつても俺等の過言であろうか。だが「もういい加減に目をさましてくれ」、おれたち今日躍進しないならば解放されるの日はいづくにか有る。

考えて貰いたいのだ。

この状況に直面して茨城愛郷会は何としたか。「ここに至って、いままら、農業経営の改善でもあるまい。道は社会大改造の一路あるのみ」と、ついに俺たちの主張に一致せんとしたのである。単なる協同組合の運動で、どうして村が救われる。協同組合では救わんとして救うことが出来ぬか、俺たちはそのことを前回の「愛郷会の批判」に詳細にかたっている。それ故、ここでは改めて何も述べないが、愛郷会がそれに着目して「社会大改造の一路あるのみ」と決意したことは、まことに同慶であった。

橘孝三郎氏（注85）は、その説「遂に吾等の起つべき秋はきた」のうちで、更に、愛郷会の過去の誤謬について自分を清算されている。それは第一に百姓勤労主義の否定と言えよう。百姓は、牛や馬じゃない。「牛馬主義で片付けられてたまるか」。百姓は人間だ、人間のもつとも必要な食物をつくっているのが百姓だ。その百姓が雨漏りのする屋根の下で、壁のすきまから吹き入る粉雪がせんべいふとんの上に降りつもるのだ。庭をしいた板敷の上に寝て、疲れをやすめるんだ。それがおれたちだ。百姓だ。おれたちは人間の人間たる生活を要求する。ともすれば勤労主義をもって百姓の百姓たるの当然の道として牛馬主義を謳歌する阿呆者がいるのは残念だ。

橘孝三郎氏は、よい点に気がついた。第二に「そろばん主義の否定」である。最早、今日、直接的税金収入のみは農村にはない。百姓は「今まで大口あいて景気待ちあぐんで来た。景気、景気と叫んで来た。この頃、その口をつぐんでしまったが、また詮めかねているようだな。私の所にもよく来る。「草花は儲かりましょう」、「牛飼いはいいでしょう」うんいいいよ、大いにいい。いいが草花作りや、牛飼いでどう儲かるのだ」現金収入にあせればあせるほど、いよいよ百姓は深みにはまって苦しくなるのだ。そんなことではどうにもならぬのである。

愛郷会はいくつて勤労主義とそろばん主義を捨てた。実におれたちはお上の役人が喋るような牛馬主義や、いわゆる多角農業や、副業収入や、協同組合では何うにもならない。そして、愛郷会が、ここに至っては、いままら農業経営の改善でもあるまい。道は社会大改造の一路あるのみ」と昂然と宣言したのであった。

然りとすならば、愛郷会と橘孝三郎氏のいわゆる社会大改造の道とは何であるか。愛郷会が、その運動の重点であった純粹経済主義を捨て（少なくとも当面の重点ではなくなった）今や昂然として、何処かへ出発せんとしているのである。その首途である。実に純粹経済主義に対して戦を挑んで来た俺たちの努力も空しくはなかった。しかし、愛郷会はいくつて行くのである。

「一切の経済制度、社会制度、政治型態を農民本位にたて直さねばならぬ」そしてまた「農民的政治闘争であれ」、「農民時代を現出せよ」であり、遂に「愛郷会の中央進出近し」重農主義者の一大同盟が結成されんとしている。その名は日本村治派同盟であったのである。

日本村治派同盟の主張は、いまだ悉く明確であるという訳には行かない。（本稿は十一月七日に書かれているが、今日までには、ま

だ同盟は結成されていない）だが、然し、それが重農主義、特に重農主義の当然の帰結である農民無産党の結成であることは、殆んど明らかなことである。その「中心部を成す人々」には、おれたちが充分、そのひととなりで愚劣であることを知っている「下中弥三郎、加藤一夫の参加をみているかに仄聞する。

抑も、橘孝三郎氏の出發は、政治運動、その有害無益であるという立論から、いわゆる政治否定の純粹主義の基調に立ったのである。が、今日、愛郷会の生命ともいうべき政治否定は、遂に否定されたのである。而して、滔々たる政界の濁流にみづから投げ入れようとして奔勞しているのである。

愛郷会は逆転した。生命を失った。みだりにその趣旨とするところを変えて、掌をかえす如くに主義主張を変えたのである。いかにして政治否定の思想から政党肯定、しかも積極的農民党の結成へまで走ろうとするものであるか。いかに今日の世相が麻のごとく乱れているとはいえ、節操を売って自ら憂如たる者は何たる餓鬼道であろう。

とは言え、おれたちは前回の「愛郷会の批判」に於て、次のように述べた。「おれたちは橘氏等の運動に一つの予見を見出すことができる。氏等の運動はいづこに行くであろうか。愛郷会の運動の発起はいわゆる純粹経済運動であった。それは政治とは全く無関係なことを標榜せられることに於て発足したのであった。しかし、愛郷会の方式では必然に政治干渉の欲求を生むであろう。いわゆるデスマーク式農民党の誕生である。現実的に（今日の社会組織のその限度内において）農村の経済力の伸長をはかろうとする氏等は、農村のもっとも大きな痛に對し放任することはできない。それは税金だ。氏等はかならず負担の過重を叫んで立たねばならない。また同様に国家の農業政策に關与するためにも政治的進出を計らねばならぬ云々」と述べている。

即ち、愛郷会に於ては、必ず必然性をもって政治に行くことをおれたちは予言したのである。現社会組織の限度においては日常的利益を求めるものは、必らず経済運動に止まることができず、政治運動に行かねばならぬことは凡そ自明の理である。それ故に、愛郷会が政治に陥ることを恐れたが故に、直接、間接にその危険を忠告し、黒色運動に進まねばならぬことを切言した。が事態がここに至っては、俺たちの忠言は空しく消え省みられるところが無かつたと言はねばならぬ。

而して、愛郷会はいまや、ブルジョア議会の傘下に参じて、一社会民衆党の役割をつとめようとしている。愛郷会の社会改造は、社会組織それ自体の改造ではなくて、ブルジョア組織の下にあって、片々たる小利、小欲を得んとするにある。それは、勿論、真の意味における何等の社会改造でもない。愛郷会よ、嬌るなかれ、而して、羊頭をかかげて狗肉をうるな。

おれたち百姓の欲するものは、農民の全的解放であつて、頭を撫でておいて、ふところをさぐる政治に参加することではない。政治で百姓がどうして解放されるだろう。とは言え、社会民衆の大部分は、今なお、政治思想にとらわれて、社会大改造のみを誤っているのだ。愛郷会それ自体の地盤たる茨城県筑波山麓のおれたち真実の農村青年は、ここに明瞭に宣言する。おれたちは山師的愛郷会の

指導部に対し、公然、解放の真の精神のもとに戦をいどむものなることを。愛郷塾それ自身の地盤が、かく動揺しているのに「中央進出」と言い、且つ、日本村治派同盟の結成と言ひ、それは笑止千万な沙汰である。

都会における愛郷塾、すなわち、かの社会民衆党は、今日、公然、個の反動団体となった。それは国家の名においてブルジョアと闘う官僚主義の化物である。封建政治を再建なそうとする反動である。今、そして愛郷塾が農村に於ける社会民衆党たらんとしているのである。ブルジョア政府の走狗となり、その交換条件に、農業政策と農民政策と租税に——政治に参与すれば、農民は救われるか。

政党が政党として大なる発達をとげた国々に於て、すべて革命はおこらない。無論解放はない。大英帝国は労働党が公然たる大政党である。その党首マクドナルドは政府を組閣した。しかし、民衆は少しも変わるところはない。否、帝国の名において、マクドナルドは一般民衆より大なる困難と生活の窮乏に堪えることを命令したではないか。国家の名に於て。

そして、その政策を遂行するために、マクドナルドは今日いわゆる超政党内閣をつくり、民衆の生活を犠牲にすることによって、ブルジョア社会組織の延長をはかっている。

現時、デモクラシーはどこにもない。政治は益々、寡頭独裁のファッショ傾向を深めつつあることは、今日の一般国家の趨勢であつて、日本村治派同盟は没落せるデモクラシー（ブルジョア支配階級との事実上の妥協）の夢を追っているのだ。

これら「社会大改造」の腐肉でしかない。

愛郷塾も必らずここに到達する。俺らはこれを予言して憚らない。全国農村青年諸兄よ、特に県下青年諸兄よ、明確な解放思想なきものの落ち行くみちは、いつでも明白だ。すべての道はローマに通じている。河は結局、海にながれて行くだけだ。愛郷塾は、漸次、あるいは急速に、反動に落ちて行き、社会ファシスト化する。

「路は社会大改造の一路だ」現社会組織を否定するものは現社会組織のもとで安全に便利には何ごともおこなえないはずである。組織を変えんと為すものが、どうして現組織の維持を死守しているブルジョア政府によって、放任せられようか。真に「社会大改造」のみちを若者は、換言すれば全民衆の解放を闘うものは、つねに地下の運動にめりこむ。それは決して日本村治派同盟の如くにしては成立しうる性質のものではない。

全農村青年諸兄、目前の小利益を追うものは、決して、真に解放されることはない。俺らはいつでも「社会組織の大改造」を追求せねばならぬのであつて、社会法規や、税額や、肥料輸入税やを問題とはしない。全然、新らしい社会、今日の社会組織とは全然異なる別の社会を欲求せねばならない。竹には桜の花は決して咲かない。解放は解放のみちよりほかに解放はない。

ロシアの百姓はかつて悉く農奴であった。土地はなく、犁はなく、馬もなく、種子もない。地主が貴族の生きた奴隷として、言語に絶する酷使をうけた。そのとき、何が起ったか。言わずと知れた農奴叛逆運動である。けれども、農奴の求めたものは、土地、種子

でなく、収用でなくて法律であり法規であつた。法律？ よろしい、法律は農奴に土地をあたえた。そのつぎに社会秩序！ そこで土地の旧地主、貴族たちに年賦償金を支払うことを命じた。そして租税を払わねばならぬ。かくて法律上の自由農民は、決して、決して、現実の自由農民ではなくて、事実上は、昔のままの農奴以外のなにもものでもない。

もっとも大切なことは法律による自由、法律による税の減免ではなく直接なる「収用」にある。それが社会改造の第一歩なのである。

いつでもある大組織（多くの場合、それは仮定的大組織で、見かけ倒しであるが）が結成されると、その大組織がさぞ偉大なる能力をもつだろうと、組織に陶醉するのが常である。けれども、その実、組織から来るものは力学的な力ではない。生れてくるものは浅間しい権力だけである。組織ができあがってしまうと、活力は削減され、あるものは化石化した官僚主義だけである。もっともよく組織された近代国家は一番下り坂にある。日本村治派同盟の結成！ 危大なる組織！ さぞかし力がありそうだ。

しかし、組織は自主行動を阻害するから、忽ち竜頭蛇尾におわる。これはおそらく諸君が同盟の結成後、まもなく見るであろう事実であることを予告しておく。

社会大改造の動力は、社会大改造の因子は、社会大改造というのは、ただひとつ、全村的な「収用」によってのみ実現される。収用とは何か。それを説く自由はない。そのことは地下に潜入しているおれたちの同志たちから聞いてほしい。

さればもう「何も無い、もう何もかも無い」窮乏は常識だ。収用への溝の高まりによって近づくべき黎明は近づく。諸兄よ、愛郷塾と日本村治派同盟によって、ブルジョアに売りわたされたい用心が肝要だ。

おれたちはそれを切言して筆をおく。

（注85）橋は、この翌年、昭和七年（一九三二年）五月十五日、中国への侵略開始、恐慌の深刻化、国際情勢の変化など、社会矛盾の露呈を機に、軍部青年将校と右翼ファシストによる、いわゆる「五・一五事件」に参加し吾々の予言通りとなった。